

## 蓮見重彦の漱石論と批評

『それから』の、代助と三千代の愛の確認方法についての蓮見重彦による解釈もユニークだ。漱石の愛の形は、つねに三角関係で、友人や兄弟を裏切るケースが多いのだが、『それから』も平岡と妻・三千代と、平岡の友人の代助の三角関係を描いている。蓮見重彦によれば、I love you の翻訳のことばで、「愛」を告白することは日本文学では、稀有なことだという。

代助が三千代に告げることばは、「僕の存在には貴方が必要だ。」であり、「代助の言葉は官能を通り越して、すぐ三千代の心に達した。」と漱石は書いた。

蓮見重彦によれば、「情報の伝達は完璧である。」という。

I love you が日本語に翻訳しがたいという漱石の自覚いらい、「私」と「貴方」との間に介在すべき「愛」の能動的他動詞性を回避しながら、その等価的表現の模作にあけくれてきた近代日本の小説は、恋愛を、快楽の対象ではなく、二人してくぐりぬけるべき試練のごときものに仕上げた。

すべてが、「愛」の一語をめぐる漱石の文体上の配慮から始まり、それがいまなお、まぎれもない現実として機能しているということ、改めて想起しておくにとどめておこう。

『道草』の特異な解釈はさておき、『それから』以後の作品に象徴される〈恋愛の構図〉は、「愛」ということばをめぐる、それが近代文学の「試練」として、以後の作品群をも規定し続けたという指摘は、いかにも蓮見的言説であり、刺激的かつ説得的な解釈だ。

蓮見重彦『夏目漱石論』が、「横たわる漱石」なることばに代表されるように、テキストを読み込む解釈によって、新たな漱石像を提示した。その後の漱石論も、テキスト論の延長上にあることは確かなようだ。このような読み方は、漱石の思惑から乖離した言説として、漱石のテキストが、「浮遊するシニフィアン」(ラカン)のように機能するとすれば、「象徴界」の漱石のみが対象となり、「想像界」へは、たどりつけないことにならないだろうか。

ところで蓮見重彦は次のようにかつて語った(批評をめぐって(蓮見重彦)——『闘争

のエチカ』より)。

僕がやっている批評のほとんどは無駄に近い列挙なんです。これもありますよ、これもありますよ、というようなものでね。こっち見てごらん下さい。夏目漱石、こんなことを書いていますよ。またこっちではこんなことを書いていますよ、という愚鈍なまでの列挙なんです。その意味では批評というより事項が並んでいるだけなんです。ところがいまの若い人たちは列挙しないんですね。非常に優雅に自分の言葉に置き換えちゃっている。(.....)

僕の無駄というのは、その無謀な列挙にある。なぜ列挙するかというと、列挙することそのものがろうじて根拠たりうるようなものしか論じないからです。たとえば、ジョン・フォードには太い大きな幹が出てくる。僕は、それを美しいと思う、というよりそのことに理由のない恐れをいただく。しかしそれには何の意味もない。ただ、太い樹木の幹が見えるというだけなんです。だから『静かなる男』にもあった、『タバコロード』にもあった、『我が谷は緑なりき』にもあったと際限なく羅列してゆくしかない。

.....みんな、批評というものを解釈だと勘違いしてしまったんですよ。解釈と云って、形式を読むこともしなければ、ましてや魂の唯物論的な擁護などと思ってもみない。共同体が容認しうるイメージへと作品を翻訳することを意味の解釈だと思っちゃった。(.....)

批評の第一の役割は、作品の意味が生成される可能性を思い切り広げることであり、それを閉ざすことではない。ところが、みんな、無意識に意味生成の場を狭めればそれが主体的だと思ってるんです。僕はそれを可能な限り豊かなものにすることを一貫してやってきた。べつに、意味を無視したわけじゃあないんです。読むことって、無数の意味の闘いでしょ。表層というのは、その闘いの現場であるわけです。解釈が始まるのは、その闘いの現場を通過してからの話でなければいけない。